

オリーブの木

No. 96
2025年 5月



教皇フランシスコが復活祭の翌日4月21日に亡くなりました。最後まで世界の平和のために祈り、常に戦争の犠牲者や社会の底辺で忘れられた人々に想いを寄せておられたとのこと。上左の写真は、ガザで傷ついた子どもたちの治療に尽力するイブラヒム神父を励ます教皇、右の1枚は有名な「焼き場に立つ少年」*、教皇が長崎訪問の際、核廃絶を訴えるために選ばれた写真です。

最後となった復活祭での言葉も、あらゆる戦争をすぐにやめ、対話と和解を通して平和をつくるよう訴えるものでした。また複数のメディアによると、教皇はガザ戦争が始まって以来ほぼ毎日、ガザの「聖家族教会」にビデオ電話をかけて、そこに宗教を問わず避難している人々に話しかけ、励まし続けられたそうです。日々の空爆に怯え、生活必需品もろくになかった人々はどれほど力づけられたことでしょう！最後の電話は4月19日、亡くなる2日前でした。

皆様の支援金は、エルサレムのピッツァバッラ枢機卿を通してそこに送られています。皆様の継続的なご支援をよろしくお願いいたします。

井上 弘子

*撮影は当時のアメリカの従軍カメラマン、ジョー・オダネル。命を落とした弟の火葬を待つ間、じっと炎を見つめながら、血がにじむほど唇を噛みしめている。



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502

Email ispalejpn@gmail.com

TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<https://seichi-no-kodomo.org>

2025 年復活祭のご挨拶

Sr.ドニーズ・アビハイダールと「飼い葉桶乳児院」(ベツレヘム)のシスター一同より

私たちは復活祭を祝いました。それは、「命」が「死」に、「希望」が「絶望」に勝利したことを祝う日です。冬の寒さに別れを告げて、夏の暖かさを迎える準備をしている今、子どもたちは喜びや驚き、元気に満ちあふれています。

まもなく5月、これからは「母の日」の準備に入ります。母の日が、捨てられた子どもたちを預かる保育施設「クレシュ(飼い葉桶乳児院)」で祝福するのは、少し悲しいことに思えるかもしれません。



幼稚園の修業式

けれども、たとえ子どもたちが実の母親に捨てられたとしても、彼らにはたくさんの「お母さん」と呼べる人(シスターや保育士)がいて、愛情を分かち合い、一緒に喜びを感じることができています。地元のことわざに、「本当の母親とは、生んだ人ではなく、育てた人のことだ」とあります。

聖地では戦争が再び激しくなり、平和が近いうちに訪れるという希望が薄れつつあります。それでも私たちは、平和が実現し、正義が行われる日が来ると、強く信じ続けています。これは、クレシュが私たちに教えてくれる最も大切な教えであり、聖ヴィンセンシオ・ア・パウロのメッセージが、「愛徳姉妹会(Filles de la Charité)」の活動を通して示していることでもあります。

最近、結婚していない母親から生まれた子どもたちを5人受け入れました。そのうち2人は双子です。中には、私たちが母親に寄り添い、支援し、助言をしたおかげで生まれてきた子もいます。もし私たちの「命が中絶よりも価値あるものだ」という信念が



イースターの卵探しに夢中の子どもたち

なければ、こうした子どもたちはこの世に生まれていなかったかもしれません。これは、私たちと子どもたちが日々体験している現実です。

今、クレシュを訪れる人は、施設が「新しい春」のような場所になったことを感じるでしょう。ここでは、花が咲くように希望のメッセージが広がり、より良い未来への願いが芽吹いています。

だからこそ、皆さまの変わらぬご支援とご厚意は、私たちにとって今まで以上に必要なのです。春の「小さな花」である子どもたちに、最善のものを届けるために、どうか力を貸してください。

たしかに、人の目から見れば、私たちの状況は困難に満ち、不安定で先の見えない毎日かもしれません。でも、キリストにあって、私たちは信仰を通して「すべてが可能になる」と実感しています。

どうか、復活祭の喜びが皆さまとご家族に訪れますように。

皆さまがまわりに蒔いているたくさんの善意に対して、神さまの豊かな祝福がありますように。復活されたキリストの光が、皆さまの心と人生を照らし、その愛を周囲に広げていけますように。

そして、キリストが死に打ち勝ったことが、私たち一人ひとりにとって希望のしるしとなり、世界に平和が訪れる助けとなりますように。

たくさんの喜び、希望、信仰とともに、私たちは皆さまのために、心をこめて祈っています。

注) 飼い葉桶乳児院は、生後1日目から6歳までの婚外子を預かる。その後は別の施設から小学校に通う。パレスチナでは、「女性が婚外で子どもを身ごもれば、その母と子の命は絶たなければならない」といういわゆる名誉殺人の風習がある。飼い葉桶乳児のシスターたちは、そのような危険で困難な状況にある女性を助け、子どもを預かって養育している。

23年ぶりに訪れたイスラエルとパレスチナ

佐藤真紀（当法人アドバイザー） 2021年から当法人にかかわる。1997年ー2002年まで、日本国際ボランティアセンター現地事務所代表としてパレスチナに駐在し、平和教育の研究と支援を行った。立教大学非常勤講師としてパレスチナ問題など中東を教えている。

イスラエル、パレスチナに行ってきました。1997年から2002年まで現地にいたのですが、第2次インティファダが始まり、2002年以降は、ビザ申請をしても3回とも拒否されました。しかし、年とともに海外に行く体力もなくなっていくだろうと思うと、今しかないと思い立ち、ヨルダンから陸路で入国を試みました。3月27日の早朝にアレンビー橋を越えると、これという質問もなく簡単に入国することができました。そして10日間の旅が始まりました。

テルアビブのデモ3月27日

3月18日に停戦合意が破られ、ガザへの攻撃が再開されました。イスラエル市民の中でも、人質が解放される可能性が遠ざかったことで、ネタニヤフ政権への怒りも増してきて、デモも盛んに行われているとのことでした。友人に聞くと今日（3月27日）の夜テルアビブでデモがあるとのこと、懐かしいエルサレムの旧市街を堪能する時間もなく、トラムと電車を乗り継いでテルアビブに向かいました。本当に便利になったなあと感心しました。街中には、ハマスの人質になっている人たちの写真があちこちに貼られて、QRコードが印刷され、彼らの人となりにアクセスできるようになっています。

この日のデモは「戦争をやめて、人質を連れ戻そう」というスローガンのもとに一万人数が集まっていました。女性やLGBTQの権利を訴えるピンクフロントという団体が、太鼓をかき鳴らし「ネタニヤフ政権にNO! 今こそ民主主義を!」というチャント（掛け声）に勢いを感じました。しかしガザでのパレスチナ人虐殺に関して反対の声を上げる団体や人はいません。

「ユダヤ人のためだけの民主主義」を彼らは守ろうとしていました。一人だけクフィーヤ（アラブ式頭巾）を



「私たちは怖くない」 LGBTQの人たちも民主主義を守ろうと声を上げる

つパレスチナに連帯を示す人がいました。

翌日、ハアレツというヘブライ語の新聞を買いました。子どもたちの写真がたくさん表紙に載っていたので、人質解放のことかなあと思って見出しをグーグルで翻訳してみると「『犠牲』、この攻撃で300人近くの女性と子どもが死亡し、停戦は終了した。恐ろしい夜の物語」と書かれています。ガザで犠牲になったパレスチナ人のことのようにです。ハアレツは“極左”の新聞と言われることがありますが、それでもこのようにガザの犠牲者のことを取り上げることは今までなかったそうです。

そのあと、私はパレスチナ側に入り、南ヘブロンでは入植者に襲われた人々の話を聞き、ジェニン難民キャンプでは、イスラエル軍による破壊行為を目の当たりにし、重い気持ちになりました。そして一週間後、もう一度テルアビブのデモを見に行きました。この日は、与党リクードの本部前でのデモ。数百人が集まっていました。リクードの党事務所の壁に、ネタニヤフ首相とカタル首長の写真をプロジェクターで写しての抗議。

最近出てきたカタル疑惑には、ネタニヤフ政権が、西岸とガザを分断させるためにカタルからハマスへの資金の流れを承認していた、というものも含まれます。ネタニヤフ政権は、調査を開始しようとするシンベトの長官を罷免したりして、自らの政治生命の延命に必死になっています。

デモの参加者の中に、人質となっていたおばあさんがいました。2023年10月23日に最初に解放されたおばあさんで、ハマスに手を振っていたので覚えている方もいるでしょう。ヨチエド・リフシツさん（当時85歳）。夫のオデットさんとともに平和活動家でもありました。ガザ地区のパレスチナ小児がん患者が化学療法を受けるためにイスラエルに渡るのを手助けしていたのです。しかし、ハマスは容赦なく夫を殺し、遺体を2月に返還しました。私もシリアやイラクで小児がんの子どもたちの支援をしてきたので、特別な思いがありました。ぽつんとベンチに腰掛けていたので、話しかけてみました。「パレスチナの子どもたちのためにあなたのされてきた行動に敬意を払いたい。ありがとう」と言ってハグさせてもらいました。ヘブライ語しかわからないという彼女は、一言「平和が大事です」と答えてくれました。

孫たちは「祖父母が今までパレスチナ人のために尽力したのに、裏切られた」という心のうちを、インタビューで答えています。彼らにはオデットさんの意志を受け継いで、これからもパレスチナの子どもの支援を続けてほしいなあと、勝手ながら思っていました。

金曜日の人質広場

テルアビブ美術館のわきに「人質広場」と呼ばれる場所があります。ハマスのトンネルを再現したり、2023年10月7日にハマスが襲ったスーパーノバ音楽祭に参加していた犠牲者のためのテントがあったり、襲撃されたキブツから避難してきた人たちのテントがあったり。そこでは情報交換をしています。話を聞くと、大概是丁寧に教えてくれます。ボランティアとしてテントにちょくちょく来ているという女性は、兵役についている3人の子どもの母親です。一枚一枚の写真を指差して、この人は、殺されてしまった、この人は戻ってきた、と説明してくれました。

「とにかく彼ら（ハマス）が要求していることを受けて、すべて与えればいい。皆が家に帰ること。なぜそうならないか？わかりません。まずは停戦して、人質が帰ってから、今の政権が交代する、しないの

話をすればいい。」

「イスラエル兵も500人はガザで殺されていますよね。あなたのお子さんたちも心配ではないですか？」と尋ねると、

「もちろん心配です。しかし軍隊は最初からリスクを覚悟してます。民間人の犠牲とは違いますよ。」

「徴兵拒否はどう思いますか？」という質問には、「いろんな考えがあっていいと思いますが、ごく少数です。うちの子はそんなことをする可能性は全くなかったですね。軍は、闘うだけではありません。コンピューターを学ぶ。そこはすべてを学ぶ場所なんです。私もそうでした。より早く大人になるんです。」

4月7日、エルサレムからアレンビー橋を経由してアンマンに行く乗り合いタクシーを待っていると、デモで知り合ったユダヤ人が携帯にメッセージをくれました。

土曜日のテルアビブのデモに、イスラエル人がパレスチナ人の犠牲者の写真を掲げてデモを行ったそうです。これは、おそらく初めてのこと。明らかに風向きは変わってきている感じがしました。

今回は、紙面の都合でパレスチナ側の話はほとんど書けませんでした。充実した旅になりました。

「反ユダヤ主義」=イスラエル批判封じの呪文、効き目どこまで

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

イスラエルの政策や軍事行動に対する批判を「反ユダヤ主義」という論理のすり替えで封じようとする動きについては、これまでしばしば取り上げてきましたが、ここで改めて問題にしたいと思います。というのも、米国でガザへの攻撃をめぐるイスラエルに対する抗議活動をしていた学生を「反ユダヤ主義」を理由に逮捕するという、司法まで動員する事態になったからです。イスラエル批判封じの切り札（英語でtrump）のように使われるこの言葉、イスラエルにとってありがたい呪文なのか。むしろ本当の反ユダヤ主義を招きかねないという危険な面もありそうです。

ガザ停戦を訴えていて逮捕

3月7日の朝日新聞夕刊「私の描くグッとムー

ビー」という欄に、藤岡拓太郎さんという漫画家が、チャプリンの映画「独裁者」について書いた文章と絵が掲載されました。絵は「ヒトラーのちょびひげの中にイスラエルのネタニヤフ首相が見える」図柄だと自身で説明し、赤い色を使って「彼らが殺した人々の血の色です」とも言っています。そして映画「独裁者」について語っている中では「チャプリンが生きていたら、パレスチナに連帯する映画をつくっていると思う。もちろん、『反ユダヤ』ではなく、『誰であれ虐殺されることがあってはならない』という、真っ当なメッセージを込めた作品にちがひありません」と想像しています。

藤岡さんがこの映画からガザ戦争を連想したのは、迫害を受けてきた歴史を持ち、とりわけナチスによる大量虐殺を経験したユダヤ人が、なぜガザで多

くの民間人を殺害し続けるのかという疑問を抱くからでしょう。そして、「ホロコーストをもたらす反ユダヤ主義の根絶」が容赦ない攻撃の言い訳にされているのはおかしい、と感じるからでしょう。

この「反ユダヤ主義」という呪文が、不当と思われるイスラエルの政策に対する当たり前の批判をも黙らせてしまう例は多く見てきましたが、トランプ政権によってイスラエルに抗議する人の逮捕の理由にまで使われ始めました。3月11日の報道によると、米国土安全保障省が、ニューヨークにあるコロンビア大学の元大学院生を逮捕しました。米国の大学キャンパスなどでガザの停戦を求める抗議活動をしていたのが、大統領令に基づく「反ユダヤ主義」活動だということです。

司法の面でも、言論の自由にとっても深刻な事態です。私（筆者）は「反ユダヤ主義」問題を強調しようと思い、藤岡さんの記事について中東問題に関心をもってくれそうな友人・知人にメールを送りました。それに対し、エルサレム時代の記者仲間の一人から次のような指摘を受けました。

「ネタニヤフをヒトラーと同一視するのは、心情的にはスカツとするでしょう」が、「ユダヤ人の首相をユダヤ人の最悪の敵であるヒトラーになぞらえるのは相手を傷つけ、『反ユダヤ主義』だと反論したくなる心情を引き出すだけでは？」

確かに、他者を非難する時は、特に公的に批判をする時は、心情に身を任せて非難することは非生産的です。論証の出来ない論理で揚げ足をとられないようにしなければなりません。藤岡さんの記事に関しては、「反ユダヤではなく」という一点に引かれるあまり、ネタニヤフ首相が独裁者であるかのように語れるのか、ということに注意を向けていなかったのは反省点です。問題は、ユダヤ人がなぜ多くの民間人犠牲者を出す攻撃を続けるのかという疑問が膨らんできている点にあると思います。

動き出したボイコット運動

当法人「聖地のこどもを支える会」では、イスラエル・パレスチナの若者を交流させる活動や現地の子どもたちの教育支援事業を続けるために、支援者のご寄付に頼るだけでなく自らの収益事業も試みようとしています。イスラエル・パレスチナゆかりの物品をバザーなどで販売するのはその一環ですが、イ

スラエル・ワインやパレスチナ・ビールの酒類販売も手掛ける案も検討しました。パレスチナ産の「タイベビール」も扱って対等な販売活動を、というアイデアです。ところが、イスラエルの物品、特に入植地で生産されるものをボイコットする運動が広がりつつある中で、イスラエル・ワインを扱うのは考えものだという意見が出て、控えることになりました。当法人は、イスラエルにもパレスチナにも公平であろうとする姿勢を貫いてきました。しかし、差別とは無縁の立場ではあっても、イスラエルの苛烈な軍事行動が強い向かい風を呼んでいる中で、イスラエルのやり方を支持しているように見られるのは本望ではないという判断です。

イスラエルに対しては、占領を終わらせ国際法を守らせる狙いで2005年からBDS運動（boycotボイコット、divestment投資撤収、sanction制裁）が始まりました。パレスチナ系の団体が提唱したものが、次第に世界の学術団体、教会、草の根運動などから支持されるようになったようです。イスラエルに対し差別的であるとして非難や反対の動きもありましたが、ガザ戦争によりこの活動への支持が広がってきたようです。

ドイツでは国会で、このBDS運動を反ユダヤ主義的だとする法案が可決されました。5年前のことでしたが、運動を支持する側はデモの中で「Ich BOYKOTTIERE Israel, aber NICHT Juden! 私はユダヤ人ではなく、イスラエルをボイコットする」というプラカードを掲げています。イスラエル批判と反ユダヤ主義の違いを政治家たちはわかっているはずなのに明言しないのを、民衆レベルでは違いをきちんと表明しているのです。



対イスラエルBDSのデモ（ベルリン）

「逆差別」批判で差別招く？

ところでトランプ大統領は関税に熱心ですが、少数派の優遇や多様性の推進を否定することにも執念を燃やしています。米国では近年、affirmative actionといって、人種や性別などで差別を受けてきた弱者の現状を是正する目的で、公職での雇用や入試においては「人種・宗教・性別などに関係なく平等に扱う」多様性重視の政策がとられてきました。このため採用基準を下げるなどの優遇措置がとられるのですが、多数派の白人からは「自分たちの採用枠が狭められる逆差別だ」との不満が出ていました。それが産業構造の変化などによって多くが職を失った白人層の不満に火をつけ、トランプ氏はその流れに乗ったといえます。

大統領に就任すると早速、さまざまな背景を持

つ多様な人々の職場参加を促進しようとする取り組みDEI（多様性・公平性・包摂性）事業の廃止を打ち出しました。「肌の色が見えない、実力主義の社会を築く」と公言しています。性別は「生物学的な男女」に限ると語り、性的少数者への配慮も否定しています。

そのトランプ氏が「反ユダヤ主義は許さない」と強調していると、ユダヤ人を特別扱いする姿勢が際立ってきます。イスラエルのガザ攻撃を批判する人々が「ユダヤ人だから反対するのではなく、イスラエルのやり方に反対しているのだ」と明確に区別しているのに、ことさら「ユダヤ人」を持ち出してイスラエル批判への攻撃を続けるようだと、ユダヤ人に批判の対象が移って本当の「反ユダヤ主義」を掘り起こしてしまわないか。そんな懸念まで抱いてしまいます。

ヤクブ・ガザウィ 7月のパイプオルガンコンサート



紛争の国イスラエルパレスチナから日本の皆様へ
平和を願う
パイプオルガンの響き

入場無料

会場で自由献金をお願いいたします。



7/19^(土) 14:00開演 (13:30開場)

日本聖公会 川口基督教会

〒550-0021大阪府大阪市西区川口1-3-8
大阪メトロ中央線または千日前線「阿波座」駅
7号出口（西郵便局横手）より徒歩7分



↑ 教会HP



7/20^(日) 17:30開演 (17:00開場)

カトリック神戸中央教会

〒650-0004 神戸市中央区中山手通1-28-7
JR・阪急「三ノ宮」東口より北野坂を上がり
山手幹線を越えて1つ目の信号左折すぐ



↑ 教会HP



7/21^(月・祝) 14:30開演 (14:00開場)

大阪・高松大司教区カテドラル カトリック玉造教会

〒540-0004 大阪市中央区玉造2-24-22
地下鉄中央線「森ノ宮」2番出口を出て西へ徒歩10分
地下鉄長堀鶴見緑地線「玉造」1番出口より徒歩10分



↑ 教会HP

お問合せ、お申し込みは **090-6538-3255** (井上弘子)

上記のほかにも、東京・横浜などで計画しています

聖地のこどもたちを お買いもので支えよう！

エキゾチック & 激レア… 聖地直送の楽しい品々をお手元に。
ヴェロニカ・バザールは当法人主宰の通販サイトです。

Veronica
ヴェロニカ・バザール
Bazaar

お申し込みお問合せはTELまたはFAXで

03-6908-6571

1  オリーブの木製ロザリオ (ベツレヘム or エルサレム 製・太い布の糸でしっかり 編まれている) 小 ¥1,200 大 ¥2,000	2  オリーブの木製ロザリオ (エルサレム十字架付きハンドメイド) ¥4,200	3  エルサレム十字架の ペンダントヘッド 各種 シルバー製 *下段欄外に説明 ¥8,000
4  エルサレム十字架の ペンダントヘッド兼ロザリオ (ゴールド&シルバーブレイテッド) ¥12,000	5  (握ると手のひらに心地よく 祈りに最適です) オリーブの木製 にぎにぎ十字架 小 ¥1,200 大 ¥2,000	6  約500g ¥2,500 約250g ¥1,300 *下段欄外に説明 なつめやしの実 (ジェリコ産、最高級のマジール種)
7  エルサレムの陶器… 壁掛け ¥5,700	8  イスラエルの宝石 エイラットストーンの ペンダント *下段欄外に説明 ¥4,200	9  ラクダ革製 肩掛けポーチ エルサレムデザイン ¥13,000
10  オール金属製 ロザリオ (エルサレム十字架付き) ¥3,800	11  ベツレヘム産オリーブウッド サラダサーバーセット ¥4,100	12  深みと香りのアラビック コーヒー粉(200g) ¥2,100

上記のほかにもさまざまな商品をご用意しています
お問合せください 03-6908-6571

お買いものは
こちらからも



*エルサレム十字架：千数百年前からエルサレムだけで使われてきた特殊な形の十字架。真ん中に大きな十字架、それを囲むように小さな十字架が上下左右にある。

*エイラットストーン：イスラエル南部の砂漠で採掘される孔雀石の一種。聖書の時代から貴重な宝石とされています。

*なつめやし：聖書参照「申命記8.8」(モーセが、約束の地に生える七つの植物の一つとして「蜜のある木」と表現しています)

ヨルダン川西岸地区、マサーフェル・ヤッタにて

この村は、2025年アカデミー賞長編ドキュメンタリー賞を受賞した映画『ノー・アザー・ランド 故郷は他にない』で知られる。

(報告：フォトジャーナリスト森佑一氏)



▲ イスラエル政府によるパレスチナ人宅解体の様子が記録された動画。



▲ 過激なイスラエル人入植者により、パレスチナ人の住宅や車が荒らされる



人質広場

◀ ハマスの本部があるとされるガザ地区の地下のトンネルを実物大に再現。人質になっている人たちのステッカーが張られている

黄色は、愛する人の帰還を待ち望む意味がある。黄色い花の売り上げは、人質解放の運動資金や家族への支援に使われる



声を上げる人々



◀ テルアビブでは毎週末に、ネタニヤフ政権に反対するデモが行われていた。戦争をやめて人質を連れ戻そうと訴える人たち



たくましく生きる



▲ シャバット(安息日)前までにぎわうテルアビブの市場

▼ テルアビブのカフェでくつろぐ人々

